

ぽたたい!

源流のひとしずく

CONTENTS

- コラム
- 第5回 源流学講座
- 川上村見聞録⑥
- 源流のよしみち
- 源流学の森づくり
- 生態調査報告
- 交流のページ

ぽたたい

源流のひとしずく

冬 第9号

ぽたたい 源流のひとしずく 第9号 発行日 平成18年1月発行
 発行所 ■財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

TEL 07465・2・0888

森と水の源流館
 住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
 財団法人吉野川紀の川源流物語
 TEL 07465・2・0888
 FAX 07465・2・0388
 URL <http://www.genryuu.or.jp>
 E-mail morimizu@genryuu.or.jp

『自然の暮らし がわかる本』

山と渓谷社
新田穂高・城ノ内まつ子

定年等を機に田舎暮らしを始める人が増えたと聞く。しかし、憧れているだけ、の人もまだ多いのでは。この本は、街から田舎に移り住んだ著者の体験を元に、田舎暮らし参入者の衣食住について事細かに照会した本です。各項目におすすめ参考本の紹介もあり、興味のある部分を追っていけるのも便利。昔から暮らしであられる方から見ればどうかはともかく、漠然と憧れていた私にはかなり「具体的に」わくわくさせてくれる本でした。(N.F)

本の紹介



交流のページ

このページは源流人会会員さんや、源流・川上村とつながる個人・団体のみなさんの活動紹介や情報交換の場です。

病名：慢性森林中毒および源流の森症候群を併発。現在の私の病状です。

初めて源流の森を訪れたのは2年前の春でしたが、川のせせらぎの音、森の湿気(森の香りがする)、大木を少しずつ包むコケの柔らかさ、「源流」の水の味。いろんなことが身に染み込んで、一瞬のうちに中毒患者になっていました。

今は遠く静岡ですが、季節の移り変わりを感じ、それに従って変化する源流の森を思うと、いても立ってもいられなくなります。でも、季節の変化に敏感になれたのは、源流の森でスタッフの方々にいろいろ教わったからだったりします。

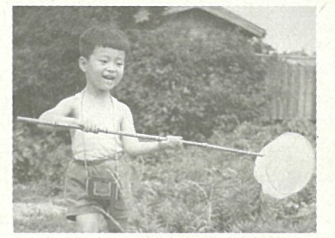
源流の森は、用法・容量を守って正しくお使いください。副作用として、上記のような症状が報告されています。

(かじこ)

私は凡そ一年前に長崎で起きた「小学女子児童殺害事件」の傷が癒えていません。関係者の皆様へのお見舞いと、不幸にも被害者となられたお嬢様のご冥福をお祈りするばかりです。

さて、その一方で昨春、永きに亘り大学で心理学の研究を続けておられた教授が定年で退官され、その後になんと「川のカウンセラー」を始められました。昨今の頻発する痛ましい事件の背景の遠因には、人間が自然に対して真摯に対峙していないからとの結論に到達されたことがその理由のようです。また、大江健三郎氏もかつて「国教」を持たない我々はせめて、豊かな自然を相互理解と「共生」の標にすべきとの話をなされたことを記憶します。商業主義に踊る「似非エコロジスト」が溢れていることに危惧を感じます。その点、森と水の源流館の皆さんは、まさに「雨だれ石を穿つ」鉄の志で地道な努力を続けておられ、頭が下がる思いで一杯です。

「共生」と云う言葉さえ安易に使われるようになった昨今、改めて「共に生きる」と云うことを深く心に刻みたいと思っています。(演出家 山崎雅史)



「あの別れから何日たったのでしょうか。日に日に寒さが深まってきましたね!

お久しぶりです!今日は白神山地の授業の中で紹介をした奈良県は川上村より、六年一組のみんなにメッセージをおくります!

ここには中筋学区ではみられない多くの生命が共生しています。プチサンショウウオ、ナガレヒキガエル、トガサワラ、トチ・・・どれも聞いたことが無いでしょう。それから源流、原生林・・・これらは川上村に住む方々、そして仲間の方々によって守られています。みんなのノートに書いた「自然と人との共生」は、ここ、川上村で学んだことなんですよ!本当に素晴らしいところですから、ぜひ一度来て下さい。みんなで待っています。

さあ、卒業まで後わずか、佐々木先生とつつ走って下さいね。ゴールで待っています!!

(稲垣伸彦)

*稲垣くん(通称ゴンちゃん)は今春、大阪での学生生活を終え、教師をめざして頑張っています。教育実習の授業の中で、森と水の源流館や水源地の森のことを紹介してくれました。この手紙はその時の生徒さんに宛てたものです。



年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です。
源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会募集中!

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替

00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

<p>シリーズ vol.8 「吉野川源流－水源地の森」 生態調査報告</p>	<p>水生昆虫</p> <p>この調査は、吉野川・紀の川の源流部に位置し、川上村が購入し、保全している原生林「水源地の森」の保全を進めるための基礎調査として、この森と水の源流館に生育・生息する動植物の現状を把握するための基礎データを得るものです。</p>	<p>期間：2003.11～2004.3 調査地域：水源地の森 (全740haのうち382ha) 調査項目：植物・巨樹・哺乳類 鳥類・両生類 は虫類・魚類 底生生物・陸上昆虫類</p>
--	--	--

岡崎博文 (檀原市立畝傍東小学校)

調査時期と地点

2003年3月初旬、4月中旬、7月中旬の3回調査を行った。標高510～540m、天然林の西端を南流する三之公川・支流キノコ又谷で4地点を選んだ。岸部、河床ともに岩盤からなるAa型(*1)である。所々に小礫(砂利)に覆われた瀬や淵がみられ、岸上部斜面に一部小崩壊と土砂の流出・流下が起こっている。

水面は、両岸から連続した樹木にほぼ全面を覆われるために、直射光の差し込む時間は短い。

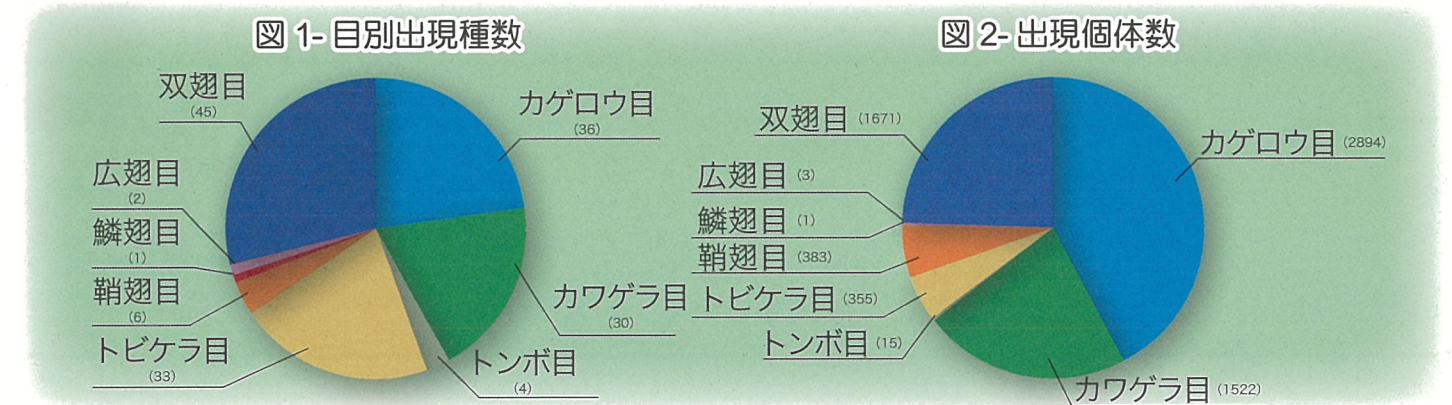
水生昆虫とは

幼虫、成虫の一部または全部を水中で生活する昆虫類をいう。カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目、トンボ目、ヘビトンボ目では、幼虫は水中生活をするが、成虫になると水辺近くで陸上生活をする。鞘翅目(ホタル等)、双翅目(カアブ等のなかま)の一部も幼虫は水中で生活する。半翅目のなかまには、成虫になっても水中や水面で生活する種類(アメンボ、マツモムシ等)がいる。水生昆虫たちは、河川や池沼で落葉の破碎・分解をおこなったり、魚などの大切な餌となり、水質の浄化や、河床の安定、多様な生態系の維持など多くの大切な役割を担っているのである。

調査結果から

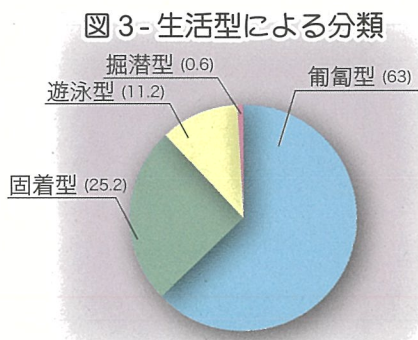
昆虫についてみると、カゲロウ目36種、カワゲラ目30種(属・科までの同定含む)、トンボ目4種、トビケラ目33種(属・科までの同定含む)、鞘翅目6種(属までの同定含む)、双翅目45種(属・科含む)、広翅目2種の計158種(属・科までの同定含む)採取した(図1)。出現した個体数の割合は図2に示したが、カゲロウ目幼虫が約4割を占め、へばりつき型のヒラタカゲロウと、遊泳型のコカゲロウが多かった。調査期間中の最多出現個体種は、フサオナシカワゲラ属の一種の幼虫である。河床の安定に大きな働きを持つ(*2)造網型のトビケラであるヒゲナガカワトビケラ属 *Stenopsyche* の幼虫は、2種6個体採取した。シマトビケラ類は、7種46個体で、造網係数は、0.8である(*3)。

生活型による分類では、匍匐(はいまわり)型63%、遊泳型11.2%、もぐり型0.6%、固着型25.2%である(図3)。



(*1) 可児の提唱した河川形態で、1蛇行区間に多くの瀬や淵があり、瀬から淵へは滝のように落ち込む溪流をいう。
(*2) エサをとるために礫と礫の間に網を張るので、礫どうしが固定され、河床が安定する。
(*3) 造網係数(%)=(造網型昆虫の湿重量)÷(全底生動物の総湿重量)×100
造網型の種は、増水などで頻りに川底が変化する河川では少なく、流れの安定した河川に多い傾向がある。造網係数は河床の安定度の目安を示すと考えられる。

生活型	特徴	主な生活場所
へばりつき型	瀬などの流水に流されないようからだつきになっている	石面
遊泳型	遊泳により移動するタイプ	石面、水草
造網型	捕獲網をつくる種類	石面、石のすき間
匍匐(はいまわり)型	匍匐により移動するタイプ	石面、石下のすき間
もぐり型	泥などにもぐるタイプ	泥、砂、落葉堆積部
固着型	吸着器官などで基質に固着する種類	石面、倒木面



冬の『きんま』



▲ 小さいころ遊んだ裏山はクヌギの林でした



▲ もくもく館



▲ 軒下に展示されている木馬



▲ 十一年前の私

また、冬が巡ってきました。山の木々が色づき、枯葉が積もり始め、そして雪が積もるころまで、山が遊び場でした。うち(森と水の源流館)の館長が出版した本は「山が学校だった」ですが、私にとっては遊び場でした。遊びのうち、今回は「きんま」を紹介しましょう。かつての林業では、山から伐採した木を運ぶ一つの方法として「木馬(きんま)」を使いました。「木馬」は、左の写真のような木製のそりです。実物は「吉野林業資料館」もくもく館」に展示されています。重量が掛かりますので、堅い樫の木で作られていました。その「木馬」のミニチュアが我々の遊び道具である「きんま」です。古くなった「木馬」の材料で作ったり、さまざまな材料でも作っていたように思います。12月のとんどの木の株を集めるときに、木をのせて運んだり、山の斜面を一気に滑ったりしました。ある日のことです。その日も家の裏山に「きんま」を持って、基地に遊びに行きました。誰と誰と遊びに行ったのかも覚えていませんが、いつもの近所の同級

生だと思えます(基地というのは、かつての炭焼きがまの跡地で、外枠は残っているけど屋根の部分が無いので、木の枝を渡してその上にシュロの葉をのせて、入り口にはすだれのようなものを作った掛けたような記憶があります。中には、シヤガの葉を敷きつめたように思います)。基地を中心に遊びながら、基地から斜面を下ると広い道に至るわけですが、なぜかその急斜面を「きんま」で滑り降りることになったのです。滑り出した瞬間、そのスピード感に圧倒されて、カジを取る暇も無く転倒。「きんま」から放り出されて何回転か転げて、このまま下の道まで転がるのかと思ったときに木にぶつかって止まりました。太ももを強打し、内出血をし、そこが腫んでしばらく治るまで時間がかかったように思い出しています。遠い昔のことで、記憶も定かではないのですがよくその程度で終わったなと思います。当然のことながら、擦り傷や服の破れは日常のようであつたと思います。ちゃんばらやターザンごっこなど、まだまだ思い出のフィールドとしては数尽きない「山が遊び場」でした。(坂口泰一)

源流学講座

第五回

山小屋づくり

源流の山小屋づくりも予定通り、バス、トイレを残して出来上がった。しかし、小屋本体が出来ただけで、まだまだ付帯工事がたくさんあるので、源流人会の皆さんの引き続きのご協力よろしく願います。

さて、今回は最初から小屋が出来上がるまでを振り返ってみるかな。そもそも源流学の森づくりの場所を下見に行ったとき、現在の箇所が目にとまった。そこは今から15年余り前はトラックが材木を積んで走っていた林道の跡地である。と言っても、誰も信じられないくらい崩落して、一人一人やつと歩けるくらいにまで荒れてしまった。小屋をつくらなければならないのは、唯一平地が残っていた。ここに道具類を入れる小屋をつくりたいと思いつく。同じつくるのなら泊まれるような小屋で、源流人会の人たちが山の暮らしを体験できるようになものにしたい、そして小屋づくりに源流人会の人達にもかわかってもらい、森づくりの基地としたい、そんな思いから始めた小屋づくりである。



12月11日現在の小屋



▲ 間伐



▲ 地面の三角が大曲



▲ コンパスを使ってレベルを決める



▲ 丁張り完成



▲ 穴を掘る



▲ 柱を立て、石をつめて固める



▲ 筋交いを打つ



川上生まれ川上育ちの達つちゃん(辻谷達雄館長)は、50年以上の山仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

まず第一に、小屋の材料は基本的には丸太でつくりたい、なるべく山小屋風に仕上げたい、との思いから水源地の森の管理棟付近で間伐した木を使うことにした。

材料の目鼻がついたところで次は基礎づくりに入る。広さは、間口が6m、奥行5mの30㎡で、約10坪の面積の小屋にすることに決め、基礎の丁張りをかける作業をする。

一般的に大工さんが建てる家の基礎はレベという機械を使って丁張りをする。機械のない時代は水盛りといって、水を使って高さを決めた。この方法は一番正確だったといわれている。ワシはそんな道具も機械も使わず、日頃山で使っているコンパスといって、山の測量をするときに使う簡単な道具で高さを測った。いくら山小屋といっても基礎だけは正確にしておかないと、後々面倒な工事が出てくるのでな。ワシは林業が専門で大工の経験はないが、棟上(家を建てる)を手伝いによく行き、いろいろなことを見てきたので、小屋を建てる方法はわかってる。が、図面はこのワシの頭の中といった、おおまかな話で「現場合せ」が一番正確で素人にはもってこいの方法である。といいながら丁張りには必ず大曲を使う。大曲とは、大工さんが使う曲尺という物差しがあるが、その大型で四

隅の直角を決める道具である。四隅に杭を立て、それにヌキ板を打ちつけて高さを決める。この作業が丁張りである。次にヌキ板に柱の位置を定める墨糸を張り、糸と糸の交わる所に柱を立てる。ヌキ板の上の面は四方同じ高さに決まっている。これで基礎が完了である。ちなみに一般的な家の基礎はコンクリートでつくられ、上の面にポルトで土台を据えつけ、土台の上に柱を立てる設計になっている。コンクリートのない昔の方法は、柱の下に川石の平らなものを据えつけ、その上に柱を立てた。それが礎といわれていた。

山小屋の柱は「ほったて」といって、50cmぐらいの穴を掘って、その中に柱を立て、しっかりと固める方法で立てるので、ほったて小屋という。まず四方の柱とその間に各1本ずつ立てた。計8本の柱を立て、柱が真っ直ぐ立つように筋交いを打つ。柱が立ち終わるところで、ちょうど時間となりました。続きは又次号でお会いしましょう。

カゲロウ目

ヒラタカゲロウのなかま(幼虫)*滑降型



ナミヒラタカゲロウ



交尾(下が雄)



単眼 複眼



亜成虫

コカゲロウ成虫雄



複眼



産卵中の雌

カワゲラ目

カワゲラのなかま



幼虫



羽化直後の成虫

脱皮殻

*葡萄(はいまわり)型

トンボ目

サナエトンボのなかま *もぐり型



幼虫



成虫

カワトンボのなかま



幼虫



成虫(産卵中の雌)

トビケラ目(巣を持つトビケラの種類)

巣を持つトビケラのなかま。巣の材料も形も種によってさまざま。巣は成長とともに大きくなる。

ムラサキトビケラ幼虫



落ち葉で巣をつくる(全長約4cm)

トビケラのなかま



細かい石で巣をつくる(全長約1cm)



小石がまじる(全長約1cm)

種名は、川合貞次編「日本産水生昆虫検索図説」1985、北川礼澄著「指標生物シリーズ ユスリカ」1986 によった。

*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

「川上村の民俗知識 その式」

川上村のお年寄りたちは、自然と共生する様々な知恵を持つておられます。長い年月をかけて先祖から受け継いできた知恵や技の数々は、どれもこれも川上村の宝です。源流の村、川上村の民俗を記録・保存、全国に発信していくこと、これも森と水の源流館の大事な使命です。現在進めている民俗調査の結果は、たくさんさんのメッセージを未来へとつないで行けるでしょう。

今回も、辻谷雄館長はじめ村の方々から聞き取った、村の伝承の一部をお届けします。ことわざには先人達の教えやユーモアが隠されています。

動物にまつわることわざ・知恵

タマムシを薄紙に巻んで筆筒に入れると、虫がつかない
「防虫効果がある」と伝わる。

コイヤウグイは、産後の女性が食べるとお乳がよくなる
「コイヤウグイは、滋養強壮によい」と伝わる。



▲開館以来、元気に泳ぐ館内水槽のウグイ。生命力が強い！

喉が痛くなったら、ハビの皮を煎じた粉をストローで喉に吹きかけるといっぺんに治る
ママシのことを、この地方の方言で「ハビ」という。喉が痛くなったら、ハビの皮を喉にはりつけるといっぺんに治る。

ハビの目は、目に効く

「ハビの目を飲むと目に効く」という。*ハビをつかまえたなら、まず皮をはぐ。皮に引つ付けて、内臓もはがれる。目と肝は飲む。血は吸る。しばらく時間が経つと血はまた出てくるので、血が出てきたら吸る。身は白くて美味しい。「蒲焼にしたり、運動会の前には身を粉にしたりにして、ハッタイ粉と混ぜて食べる。昔はハッタイコをよく食べた」。

ハビの皮を切って砂糖湯に入れて飲んだら熱さがる
「風邪の熱下しに効く」と伝わる。

山の魚は台風が来る前、砂を食う

「魚は自身が大水で流されないように、台風を察知して砂を食べ、重量を増す。魚が砂を食べていたら『台風が来る』と知った」という。

茶種の花の出る頃は、キツネにだまされる
「昔はよくキツネやタヌキにだまされた」と村のお年寄りはいう。

食にまつわることわざ・知恵
キュウリは輪切りにするな
井光集落では「輪切りにすると猿の顔に似ているから、縦に切る」とか「骸骨に見えるから、斜めに切る」という。

秋子は保存して、春子は虫がつくの

秋にできるシイタケは保存して、春にできるものは虫がつきやすいので食べるように、という教え。

小麦餅、食べて田仕事忙になる

7月に小麦餅（小麦ともち米を半々でついた餅）を食べる風習があった。柿の葉に敷いて食べた。小麦餅を食べる頃から、田の農繁期となる。

フンドシの山流れ、くりに引っかけたら離れぬ
大食い例えて、「杭（食い）にかかったら離れない」。「山行きさん」には大食いの人が多かった。

くりにきは、ごうりき
よく食べる人は、力が強い。

あひんで、貧乏
ご飯のおかずのことを、サイ（菜）という。サイを多く食べる人は食費がかさんで、いつまでたっても貧乏である、ということ。辻谷館長も若かりし頃「飯を

源流の森づくり

川上村は奈良県の村では3番目に広い面積をもち、その内95%が森林です。以前は少し田んぼがあったようですが、現在は1枚もありません。こんな急峻な土地に人々は森とともに暮らしてきました。林業が栄えていたころは8千人いた人口も、現在は2千3百人足らずです。奈良県で一番の高齢化率ということですが、かかる医療費は一番少ないとのこと。川上村は、奈良県で一番元気な村なのです。

吉野川の傍らから山の上まで点在する26の集落は、それぞれに言葉や習慣が異なります。車や便利さのない時代に、生活の中で培われてきた生きる知恵や技術をお持ちの方は、たいていが70歳を越えておられます。自然と密接に関わってきたらしについてお話を伺おうと思っても、既に文化が途絶えていたり、詳しい人も「ありやあ、もう亡くなったよ」ということがしばしば。

岩手県遠野地方は昔話で有名なところですが、寒い冬の日や夜は、囲炉裏を囲んで祖母から孫へと、昔話が語り継がれてきました。昔話には歴史だけでなく、くらしの知恵や、生きぬく勇氣がまつています。

これからまだしばらく寒さの厳しい冬が近づきますが、そんなときにこそ、集落散歩がオススメ。おじいちゃん、おばあちゃんと仲良くなつて、こたつで昔話にじっくり耳をかたむける、そんな冬を過ごしてみたいかがでしょう。しなの



▲根田先生（前列中央）と学生たち（奈良教育大学 根田克彦）

奈良教育大学総合教育課程環境教育コース地域環境専修では、毎年川上村で調査を行っています。今年で9年になります。調査内容は毎年変わりますが、どこで買物するか、この村では商店がない集落があり、それらの集落の人々はどこで買物しているのか疑問に思ったからです。一人暮らしのおばあさんもあります。しかし、調査の結果は意外に失礼！皆さん不便を感じていないということでした。まず、行商が来ます。また、近くに住む子供さん、近所の人が時々必要なものを届けてくれるとのこと。「コミュニティがきていることの証でしょう。さらに野菜等は自分で作るもしくは近所の人が分けてくれるということでした。」

根田先生より

私は英国の研究をしているのですが、英国では今「食料砂漠」が問題になっています。食料砂漠は、近隣の食料品店が廃業して、身近な地域で食料品を買物できなくなっている地域のことです。特に交通弱者にとって問題となります。しかし、川上村では近くに食料品店がなくとも、「コミュニティの力と行商により、食料砂漠は存在しないようです。これも川上村の良い雰囲気のコミュニティを維持してくるよう、心より願っています。」

源流学の森づくり

11/5(土) 晴れ

とうとうこの二日で、今年度の森づくりの行事としては小屋づくりが最後となっています。前回、棟上げ作業まで進んでいましたが、小屋として使えるようになるにはまだまだです。前回終了後も、17年中に小屋を完成させるべく館長を中心にスタッフ、源流人会有志、村内のボランティアの皆さんで、こつこつと作業を続け屋根まで完成しました。

今回は吉野材の間伐材を使って、壁を張る作業を行いました。秋晴れで紅葉も輝いていました。丸太を縦に割って壁の枠にあわせて面を取り、はめ込んで釘を打っていきます。天気の良い日もあって、作業もはかどり、前面の壁はほぼ完成しました。最後にみんなで壁の裏に名前を残してこの日の作業終了です。



1度に5合、多い時で6合、おかずを5杯食べていたよ」という。
申歳の梅はぶら漬けどけ
「どういうわけか、昔から申歳の梅はエエと言うた」という。

オミと約束は固いほらぐまの

オミとは、「ごはん、そうめん、野菜、油揚げなどを薄い味噌味でこつ煮した料理。シャブシャブしているより、固く炊いた方が美味しい、という教え。

蒟蒻つくだるとき餅の詰むら固まる
それほど蒟蒻を固める時は神経を使う、ということか。

蒟蒻つくだるとき、トチのアク抜くときは、塩をわつたあかん
塩が入ると、蒟蒻が固まらない。また、トチのアク抜き時にも上手いかわない、という教え。

ウナギ開くとき、キュウリの葉でウナギつかんだら滑る
キュウリの葉には小さな毛がはえているから、滑らない。



▲灰汁を加えてコンニャクを固める。長年の経験がモノをいう。

11/6(日) 雨

朝から怪しいお天気でしたが、昼前からパラパラと雨が・・・。今日のメインイベントは棟上げ祝いのゴクマキです。まずは、棟上げ式です。棟の上に魔除けの矢をのせ、酒、塩、米、魚、餅を供えます。それらを四隅にまいて、お待ちかねのゴクマキだったので、雨が激しくなつたので、用意していただいた餅とトチ餅はそのままいただきました。それから、館長の奥さんと「もくもく館」の喜家村さんに、とつても体が温まる郷土料理「おみ」を作ってもらいました。グルメを堪能した後は雨が強くなってきたため、壁づくりを早めに切り上げて、水源地の森へ移動して、しとしと雨の溪谷を楽しみました。夕方、館に帰ると雨も上がり、空から大きな虹が出現してくれました。

